ワンポイントアドバイス

成長曲線を活用しよう

川口市立医療センター
小児科　酢谷（すたに）　明人（あきと）

「こどもの身長が低い」「背の伸びが少ない」など、子どもの成長に関する相談は小児内分泌外来に受診されるきっかけとして非常に多いものです。いわゆる低身長の相談になりますが、低身長の定義は相対的です。

一般的に同性別、年齢の平均身長に比べて-2SD以下（およそ100人に2～ 3人程度）、もしくは2年間の成長速度が-1.5SD以下である場合に低身長と判断されます。幼稚園、保育園、学校などで身体測定を行った際、成長曲線に記録しておくことで、低身長および成長率の低下がないかを判断することが容易になります。

一般的に身長は骨成熟と共に伸びていき、骨成熟が完成するころ（おおよそ、男児では17歳、女児では15歳）に止まります。低身長をきたす疾患の中には治療可能なものも含まれ、一定程度の治療期間を確保するためには、早期発見早期治療が望まれます。

また、各主要臓器（心臓、腎臓、肝臓、腸）の異常に伴って、低身長となることがあり、症状に気づかれにくい慢性疾患の発見にも成長曲線は役立ちます。

成長曲線は母子手帳にもありますし、日本小児内分泌学会や製薬会社のホームページなどからもダウンロードすることが可能です。気になる場合はお子さんの身長を記録してみることをお勧めします。

当院では、複数の内分泌専門医のもと、低身長の原因となる各種疾患の診断および治療を行っております。ぜひお気軽にご相談ください。